（平成２５年１０月　記述）

「日々是好日」とは？　傘寿雑感

江見 盛行

◎　はじめに

「日々是好日」とは、禅宗の言葉で、今日と言う日をありのままに受け止めて、今日一日を生きる、と言うような意味らしい。

私がこの言葉に初めて出会ったのは、中学二年のときだった。それは戦後間もない頃で熊本市のデパートの中を歩いていたとき、色紙売場だったのだろうか、壁に「日々是好日　武者小路実篤」と書かれた色紙か何かが架けてあるのが目に入った。当時、武者小路実篤が誰かも良く知らなかったが、その言葉を、頑張って日々を好日にせよと言う意味に受け取り、そんなに頑張ることが出来るのかと思ったのである。一瞬の出来事だったし、ずっと忘れていたが、何故か最近この時のことが思い出される。

一昨年来、読売新聞が「昭和時代」と題して、第一部・昭和三十年代、第二部・戦後転換期（昭和四十年～五十四年）、第三部・・、を特集している。こうしたものを読むと、当時、特に昭和三十年代は、我国も私も、懸命に生きていたのだな、混乱や失敗もあったが、良く此処まで来たものだな、としみじみ思う。より良い明日を信じて一生懸命だったと言う意味で、当時は我国も私も、「日々」と言うより「明日」是好日だったのかな、と思い出される。

ところで、私は昭和八年三月生まれで今年傘寿を迎えている。気が付くと最近、私は体力を考えて、無理をしない日々を送ろうとしている。それは、頑張ると体が持たないからで、理屈や思想とは関係がない。唯そうなると、「日々是好日」を、頑張りとか一生懸命とかとは、違った意味で受け取るようになる。冒頭の「今日と言う日をありのままに受け止めて」と言うことが、理屈の上では少し分かったような気もしている。

こうしたことから、「日々是好日」をキイ・ワードに、過去を振り返ってみた。

◎　少年の日の記憶

私は太平洋戦争の敗戦を、旧関東州（現・中国遼寧省）大連市で、中学一年生として迎えた。父親は公務員だったが、昭和二十年秋頃、進駐してきたソ連軍に拘引されてシベリヤに送られ、その後、昭和三十一年夏まで中国の戦犯収容所（遼寧省撫順市）に入れられていた。我々家族は、父親の安否が分からないまま昭和二十二年二月、母親に連れられて母の実家である熊本の農村に引揚げた。そして、四月、私は熊本市内の熊本中学（旧制）二年に転入学した。しかし、校舎は戦災で全焼しており、近くにあった旧陸軍の兵舎に手を入れたバラックが教室だった。周辺には、同じ兵舎を転用した引揚者住宅が建ち並んでいた。

前記のデパート売場での出来事は、その転入学直前の話である。　農村に引揚げ、そのとき初めて母親に連れられ熊本市のデパートに出かけた。デパートと言っても、焼け跡に建てられた木造二階建て程度の建物だったと記憶するが、私は、デパートがもう営業しているのかと驚いた。母親は入学の準備に何か買うものがあったのだろう、それを買うと直ぐデパートを出た。私が目にした色紙など、目にも留まらなかったと思う。

私は、もう直ぐ熊本市内の中学に通学することになっていたわけだが、それは、自宅から四キロの田舎道を歩き、四十分ほど超満員の私鉄電車に揺られ、さらに二十分ほど市内の道を歩く、と言うことだった。子供のことで、別に「頑張ろう」などとは考えていなかったが、それなりの覚悟は出来ていたのだろう。偶々「日々是好日」が目に入り、咄嗟にそれを、「頑張って日々を好日にせよ」と言う意味に受け取り、なるほどとも思ったが、「そんなに頑張ることが出来るのか」とも思ったのである。

それだけのことだったが、最近、それを思い出す。

ところで、その後の私の日々である。

中学三年～高校一年（同じ学校で自動的に新制高校一年になった）の頃、早熟な数人の友人が出来た。彼等は西洋の文豪たちの作品を読んでいた。私は、そもそもそう言う本を、当時の私が読むべきものとは思っていなかった。刺激を受けた私は、必死になってそれらの本を読んだ。当時、世界文学全集などは手近に無かったが、一人の友人の家にあり、それを借りて読んだ。

彼等の内の一人は、高校時代、文芸部に入って小説を書いた。主人公が失恋する話だが、最後に主人公に、「僕は彼女にではなく、恋に恋していたのかも知れない」と言わせていた。私は「恋に恋する」、そう言う感情もあるのかと、感心したのを覚えている。

友人の兄に旧制高校に通う立派な人がいた。その人はマルキシズムに関心があったようだが、そうしたことも影響したのか、私は高校二・三年の頃、「資本論」の入門書などを読むようになっていた。一方、小泉信三「共産主義批判の常識」が当時ベストセラーになっていたと思うが、それは自分で買って読んだ。社会や経済の問題に大いに関心を持ち、部活では社会科学研究部に入っていた。

スポーツは特にやらなかったが、往復八キロの徒歩通学は、足腰の鍛錬にはなったと思う。校庭で良くサッカーをやったが、私はかなり上手かった。

振り返ってみると、私は畏友に恵まれ、彼等から刺激を受けながら未知の世界を彷徨よった。「日々是好日」など思い出しもしなかったし、頑張ったと言う自覚も無いが、嫌にもならず日々八キロの道を歩き、背伸びをしながら一生懸命だったと言う意味では、当時の日々は、「好日」だったのかも知れない。

◎　青・壮年期の回想

昭和二十八年九大に入学した。普通の平凡な学生だったと思っているが、普通と違ったのは、三年の初めに休学し、一年弱を医学部の近くにあった崇福寺（禅宗～臨済宗）で過ごしたことだろう。

理由は、いま理屈を付ければ色々言えるが、当時の気持としては、それ以外に道が無かった。母親には迷惑をかけた訳だが、あとで聞くと、この子は法学部を出て坊主になるのか、と心配したらしい。今は、亡き母の冥福を祈るだけだが、あの程度のことでは坊主にはなれなかっただろう。

寺での生活は、朝早く起きて廊下の拭き掃除をし、昼は薪割り等の作務をこなした。夜は、参禅をし、老師の都合がつけば書物による提唱（講義）があった。書物は、東嶺和尚編輯「宗門無尽燈論」で漢文だった。老師はそれを淡々と読み下していくのだが、聞いていると意味が分かった。ただ、提唱は途中で終り、その和綴じ・木版印刷・上下二巻の書物を頂戴しているのだが、残念ながらその侭になっている。

禅宗の寺では毎年十二月一日～八日、臘八接心と称する坐禅をやる。釈迦成道の日とされる十二月八日朝に因んで、八日未明まで一週間ひたすら坐禅をやるのである。最終日八日の朝、接心を終え慰労の意味だったと思うが、老師は参加者を自室に請じてお茶を振舞われた。

私は疲労困憊して、姿勢を正して坐っているのがやっとだったのを覚えている。

一年後、復学し、昭和三十三年四月志望だった製造業の一隅に職を得た。入った会社は堅実な社風で、「王道を歩め」と教えられた。仕事の中味は歳とともにそれなりに変わったが、育った部門は労務部門だった。我国経済の成長が軌道に乗り、総評を中心に労組が春闘を組織し、民間企業でもストライキが頻発していた時期である。私にとって労務は希望の部署であり、労務管理諸制度の改革や、労使間さらには会社と従業員間の信頼関係確立に、懸命に努力した。労組幹部や勤務した工場の現場の人たちとの間で、心を許しあう友人が何人か出来た。

現役時代の終わり頃、所謂「失われた十年」を経験したが、我々の青・壮年期は、総じて言えば明日が信じられる時代だったのではないだろうか。我々は明日のために懸命に生きた。当時の日々は、「明日是好日」だったのかも知れない。

◎　傘寿の日々

最近の私だが、傘寿を迎え体力の衰えは否みようがない。尤も、気力は体力ほどには衰えていないらしく、この差が、時として無理（頑張り）を生み、体調不良に至ることがある。この繰り返しの中から、最近漸く、無理を避け無事を楽しむ生活が少しずつ身につきつつあるように思う。日々の変わりない営みの中で静かな時間が流れるとき、「日々是好日」とはこれか、と思わないでもない。

しかし、私は確実に老いつつあり、老いることは楽ではない（釈迦は生・老・病・死を苦と捉え、そこから仏教が生まれている）。さらに、我国はこの二十数年停滞と混迷の中にあり、加えて昨今は、国防や地震対策など永年にわたる安全意識欠如の咎めを突きつけられている（最近やっと、我国政府は国家再建へ踏み出そうとしているが、その成否は、今後における国民の覚悟の如何によるだろう）。世界は歴史の大きな曲がり角にあり、各国とも多様且つ困難な問題を抱え、国際関係は混乱を続けている（我国は中国・朝鮮半島問題を抱え、ここでも国民の覚悟が問われていると思う）。そして地球は、温暖化と環境破壊が確実に進行している。

世の中のことは心配だらけで、これらを忘れて「日々是好日」はあり得ないだろう、とも

思う。

そもそも、「日々是好日（にちにち、これこうにち)」とは、どう言うことなのだろうか。

それは、中国唐末の僧・雲門文偃の語で、禅の公案集「碧巌録」第六則に、「雲門十五日」として載っており、「悟り」にかかわる言葉らしい。従って、それが分かるには、坐禅をして体得するほか無いのかも知れない。

それを敢えて言葉で説明すれば、冒頭に書いた通り、「今日と言う日をありのままに受け止めて、今日一日を生きる」と言うことになるらしいのだが、我々凡俗の徒には、もう少し踏み込んだ説明が必要である。

禅宗の悟りについて、正岡子規が「病牀六尺」の中で、一つの感想を述べている。子規が禅について如何ほどの研鑽を積んだ人かは知らないが、私には、彼のこの感想が、悟りについての一番分かり易い説明のように思えている。

彼は脊椎カリエスに罹り、三十五歳で死去するまでの数年間を、「毎朝寐起には死ぬる程苦しい」痛みに襲われながら、根岸の茅屋で、「病床六尺、これが我世界である」として生きていた。そうした中で、次のように言っているのである。

「余は今まで禅宗のいわゆる悟りという事を誤解していた。悟りという事は如何なる場合にも平気で死ねる事かと思って居たのは間違いで、悟りという事は如何なる場合にも平気で生きて居る事であった。

因みに問う。狗子に仏性ありや。　曰、苦。

また問う。祖師西来の意は奈何。　曰、苦。

また問う。　・・・・・・・・・・　曰、苦。」

子規が、「如何なる場合にも平気で生きて居たか」どうかは知らない。「如何なる場合にも平気で死ねる事」と「如何なる場合にも平気で生きて居る事」とは、畢竟同じ事かも知れない。しかし、子規の言ったことは分かるような気がする。禅宗は「今・此処を生きよ」と教える。「生きる時と場所は、今・此処にしか無い」、と言うことだと思う。

これからの日々、「是好日」として生きたいものだと思っている。

以上